



小嶋裕一郎  
副院長

センターを県内で初めて立ち上げる。炎症性腸疾患に関して、同院の患者は県内全体の4割以上を占めていて、同院副院長の小嶋裕一郎医師（消

やまなし  
医療最前線  
流れをつくる  
県立中央病院から

<243>

潰瘍性大腸炎とクローン病は「炎症性腸疾患」と呼ばれる慢性の病気だ。山梨県立中央病院は4月、増加する患者に対応しようと炎症性腸疾患

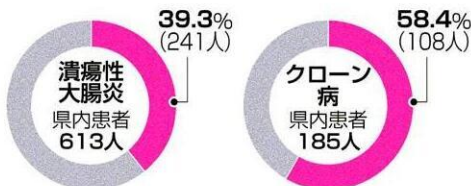
（化器内科）は「多職種によるチームで最新の治療と情報を提供したい」と話している。小嶋医師によると、炎症性腸疾患はいずれも腸の粘膜に

慢性的な炎症や潰瘍が生じる原因不明の難病。血便、腹痛、下痢などが症状として現れるが、適切な治療を続けることで多くは軽症ですみ、発症前

る。同院は以前から炎症性腸疾患の治療に力を注いできた。同院ゲノム解析センターでは、治療薬の副作用につながる

プの治療薬が登場していて、専門知識を持った薬剤師が詳細な説明を担う。状況に応じて治療薬が基本的に決まっているが、と異なり「患者が選択する余地がある」（小嶋医師）ことを踏まえ、患者のライフスタイルに合った治療を進めていく。管理栄養士には、症状改善に向けて治療と同様に重要な食事指導に当たってもらう。

山梨県立中央病院  
炎症性腸疾患患者の占有率



2021年3月末現在

# 県内初、患者増加に対応 炎症性腸疾患センター設立へ

と変わらない生活をする事ができる。従来、欧米に多い病気とされてきたが最近では日本でも増加が指摘されている。食事や生活習慣の欧米化が影響しているとみられ、山梨県内の患者数は潰瘍性大腸炎が613人、クローン病が185人（2021年3月末時点。このうち同院の患者はそれぞれ241人、108人となっている）

る。遺伝子の研究を早期から進め、新たな知見を得てきた。数多くの治験を実施してきた実績もある。

今後患者数の増加が見込まれることから、体制強化を図ろうと炎症性腸疾患センターの設立を計画した。医師、看護師のほか、薬剤師、管理栄養士の配置を検討している。

炎症性腸疾患は新しいタイプ

炎症性腸疾患は新しいタイプ

第2、4木曜日に掲載し